

潜在的自尊心の指標としての「名前の選好」 —— 潜在連合テストとの相関関係からの検討 ——¹

稲垣 勉*・上原依子**

(2017年10月24日 受理)

“Name-Liking” as an Implicit Measure of Global Self-Esteem:
The Relationship Between Name-Liking and the Implicit Association Test Among Japanese People

INAGAKI Tsutomu, UEHARA Yoriko

要約

本研究の目的は、Gebauer, Riketta, Broemer, & Maio (2008) によって潜在的自尊心の一指標として提案されている「自身の名前の選好」が、本邦でも使用可能か否かを検討することであった。40名の男女を対象に、名前の選好尺度と Implicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)、顕在的自尊心尺度の関連を検討した。実験の結果、以下の3点が明らかになった。(1) 名前の選好尺度得点は、顕在的自尊心尺度得点と正の相関が有意であった ($r = .33, p < .05$)。 (2) 名前の選好尺度得点は、IAT得点とも正の相関を示したが、有意には至らなかった ($r = .23, ns$)。 (3) 男女別に相関関係を確認すると、男性のみ、名前の選好尺度得点と IAT得点との間に有意な正の相関が得られた ($r = .46, p < .05$)。性によって相関のパターンが異なった点について考察し、今後の課題を挙げた。

キーワード：潜在的自尊心、顕在的自尊心、名前の選好、潜在連合テスト

¹ 本研究は、The 6th Asian Congress of Health Psychology において発表された内容に新たなデータを加え、再分析を行ったものである。ご協力を賜りました参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。

* 鹿児島大学教育学系 講師

** 大阪大学大学院人間科学研究科 大学院生

問題と目的

自尊心 (self-esteem; 以下 SE とする)² は、自分自身に対する肯定的な感情、自分を価値ある存在として捉える感覚である (伊藤, 2002)。これまでの研究において、SE は種々の心理的健康に関わる指標と正の関連を持つことが繰り返し示されてきた。たとえば、SE は人生に対する満足感などのポジティブな感情とは正の相関がある一方、抑うつや不安、孤独感といったネガティブな感情とは負の相関があることが示されている (藤井, 2014; 伊藤・小玉, 2005)。また、SE の低さは、思春期における非行や薬物使用、自殺と関連するという報告もある (伊藤, 2002)。

従来、SE の測定には自己報告式の尺度が用いられてきた。海外において多く用いられている尺度の一つに Rosenberg (1965) による 10 項目からなる尺度があり、この尺度は本邦においても複数の研究者が翻訳し、後続の研究で用いられている (e.g., 星野, 1970; 桜井, 2000; 山本・松井・山成, 1982)³。先述の結果は、いずれもこうした自己報告による尺度を用いて行われた研究の成果である。

その一方で、近年は意識的な内省を伴わない手法を用いた SE の測定も盛んになってきた。従来の自己報告による測定では、社会的な望ましさによる回答の歪曲が生じることや、自身でも意識していない (i.e., 潜在的な) 側面を測定することは不可能であるため、こうした測度が台頭してきたと言える。潜在的な自尊心 (Implicit SE; 以下 ISE とする) を測定する手法の中で、著名なものには Name Letter Task (Nuttin, 1985; 以下 NLT とする) や Implicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 以下 IAT とする) などが挙げられる。NLT は自身のイニシャルに含まれるアルファベットの好みを ISE の指標とするものであり、IAT は「自己」と「快い」という概念間の連合強度と、「自己」と「不快な」という概念間の連合強度の差 (反応時間を用いて表される) を求め、その差を ISE の指標とするものである⁴。本稿ではこれ以降、従前の自己報告によって測定された SE のことを、ISE に対応させる形で Explicit SE (以下 ESE) と表記して論を進める。

それでは、ISE を測定する尺度は、これまでの ESE 尺度を用いていた研究にどのような発見をもたらしたのだろうか。代表的な研究の一つに、Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll (2003) が挙げられる。Jordan et al. (2003) は、実験参加者の ESE と ISE とを組み合わせさせて測定し、ESE が高い者の中には、ISE も高い「安定的」な高 SE (secure high SE) タイプと、

² 文献によって自尊感情と表記するものもあるが、本稿では特に区別せず、自尊心と統一して表記する。

³ 特に本邦においては、山本他 (1982) の尺度が多く用いられているように思われる。Google Scholar (<https://scholar.google.co.jp>) を用いて検索した結果、星野 (1970) は 60 件、桜井 (2000) は 31 件、山本他 (1982) は 381 件、学術論文において引用がなされていた (最終参照日: 2017 年 10 月 23 日)。本研究では最も引用の多い山本他 (1982) の尺度を用いたが、小塩・岡田・茂垣・並川・脇田 (2014) は、翻訳の種類は尺度得点の平均値に対して有意な影響を及ぼさないことを示しており、他の尺度を使用した場合に結果が大きく異なる可能性は低いと思われる。

⁴ IAT の手続きなどの詳細は、方法の箇所所述べる。

ISE は低い「防衛的な」高 SE (defensive high SE) タイプの 2 種類が存在することを見出した。前者は ESE・ISE の両者が高く、自己に対する確信的なポジティブさを持つ一方、後者は脅威に対して脆弱なポジティブさを持つとされる。Jordan et al. (2003) は、自己愛や内集団ひいきなどの特性や行動傾向を測定し、防衛的な高 SE 者が、これらの指標について強く反応することを示した。本邦では藤井 (2014) や原島・小口 (2007) が、高 ESE かつ低 ISE を持つ防衛的 SE タイプの内集団ひいきが強いことを示し、Jordan et al. (2003) と一致した結果を得ている。さらに藤井 (2014) は、ISE の測定に NLT を使用し、原島・小口 (2007) の知見を再現するとともに、高 ESE かつ低 ISE 者は抑うつ・不安が高いことも示した。これらの結果は、精神的な健康には、ESE のみならず ISE の高さも影響するというを示している。したがって、特に知見の少ない ISE を適切に測定することは、精神的健康の促進を目指す介入研究などにおいて重要になると言えるだろう。

原島・小口 (2007) や藤井 (2014) の知見は、反応時間を指標とする IAT や、自身のイニシャルに含まれるアルファベットの好みを指標とする NLT のように、異なる方法を用いて ISE を測定しても、同様の結果が得られることを示している。IAT はパソコンなどのコンピュータを用いて実施することが多い一方、NLT は質問紙と同様のフォーマットで実施できるため、たとえばコンピュータを用意できない環境で一斉に実施したい場合は IAT の代わりに NLT を使い、コンピュータが複数台ある環境では印刷の手間や回答のデータ入力にかかるコストを抑えるために IAT を実施すればよい、と言えるかもしれない。

しかし、両者を代替可能であると考えられるか否かについては議論の余地がある。その理由として、NLT と IAT を用いて ISE を測定した際に、両者の相関がかなり弱いという点が挙げられる。たとえば Bosson, Swann, & Pennebaker (2000) は、両者の相関係数は -0.06 という値を報告している。すなわち、IAT で高い ISE を示した者が、NLT でも同様に高い ISE を示すとは限らないということである。したがって、この両者は ISE の同一の側面を測定しているとは言いがたい。

こうした流れの中で、Gebauer, Riketta, Broemer, & Maio (2008) は新たな ISE の測度を提案している。それは、自身の「名前」の選好を問う形式をとり、「あなたは、自分のフルネームがどれくらい好きですか?」という質問を通じて、参加者の全般的な (能力・社会といった領域固有のものでない) 潜在的自尊心を測定しようとするものである。Gebauer et al. (2008) は複数の実験を通して、この測定方法の妥当性を検討している。たとえば、名前の選好を測定する尺度が、IAT と NLT で測定した ISE、そして自己報告を用いて測定した ESE や主観的幸福感、人生に対する満足感とは正の相関を有することを示した。また、名前の選好と抑うつとの間には負の相関が示され、社会的望ましき反応尺度の 2 下位尺度のうち、印象操作とは有意な相関はなく、自己欺瞞との間にわずかな正の相関が示された。さらに、この名前の選好で測定される潜在的自尊心が、能力領域や社会領域といった領域固有の自尊心ではなく、それらを含む全般的な (global) 潜在的自尊心であることを確認するために、名前の選好を測定する尺度の

得点に対し、四つの領域固有の自尊心尺度の得点と全般的な自尊心尺度の得点という五つの変数を独立変数とする階層的重回帰分析を実施し、全般的な自尊心尺度の得点のみが名前の選好尺度の得点を予測することを示した。

Gebauer et al. (2008) において名前の選好を尋ねる尺度と ESE, 二つの ISE 尺度の相関は .20 ~ .40 程度であり、強い相関とは言い難い。しかしながら、IAT や NLT で測定した ISE と正の相関があることを踏まえれば、IAT や NLT の使用が難しい環境 (e.g., コンピュータを用意できない, 20 個以上のアルファベットに対する評価を求めるには時間が足りない, など) において、この「名前への選好」尺度を使うことは有力な選択肢の一つに入ってくるだろう。実際に、この氏名の選好を用いた研究は本邦でも散見される (e.g., 藤井・澤海・相川, 2016; 稲垣・松尾・大浦・島・福井, 2017a; 稲垣・大浦・松尾・島・福井, 2017b; 中井・沼崎, 2017; 津村・村田, 2016)。たとえば稲垣他 (2017a) は、幼少期の被虐待経験の高さが見捨てられ不安、親密性の回避といった不安定な愛着スタイルを高め、結果として ESE・ISE の両者にネガティブな影響を及ぼすことを示した。また、稲垣他 (2017b) は、ESE・ISE との間に不一致があり、かつ両者の不一致の程度が大きいほど、自殺念慮が高くなることを示している。

藤井他 (2016) は、Gebauer et al. (2008) の手法が日本でも使用可能か否かを検討するため、彼らの研究の一部を追試することで、妥当性の検討を行った。この研究では 1448 名の男女に対し、名前の選好尺度の他、Gebauer et al. (2008) で使用されたものと同様の尺度を用いて回答を求めたところ、名前の選好尺度と他の各尺度の相関パターンおよび相関係数は Gebauer et al. (2008) と近似していた。たとえばフルネームへの選好は顕在的自尊心、人生に対する満足感と中程度の正相関、自己欺瞞とはごく弱い正相関を示し、抑うつとは中程度の負の相関を示した。また、フルネームへの選好と印象操作との相関は有意ではなかった。したがって本邦においても、名前の選好尺度の基準関連妥当性の一部が確認されたと言える。

ただし、藤井他 (2016) の研究では、他の ISE の指標 (IAT, NLT) を並行して使用していない。この尺度が本邦でも適用可能と判断するためには、藤井他 (2016) が使用した名前の選好尺度が、IAT や NLT とともに正の相関を有することを確認する必要がある。NLT については、たとえば藤井 (2016) は日本人のデータではないが、日本と同じ東アジア圏に属する韓国人女子大学生を対象に NLT と名前の選好尺度の両者を実施し、両者の間に $r = .28$ ($p < .05$) の正の相関を見出している。したがって、NLT と名前尺度の相関については、Gebauer et al. (2008) と同様の結果が得られる可能性が高いと思われる。

一方で、本邦もしくは東アジア圏において IAT と名前の選好尺度との相関を検討した研究は見当たらない。もし、IAT と名前の選好尺度の相関係数が Gebauer et al. (2008) と同程度の相関を示すことを確認できれば、本邦で名前の選好尺度を潜在的自尊心の指標として扱うことについて、一定の妥当性が担保されると考えられる。そこで、本研究ではこの二つの潜在的測度を用いて ISE を測定し、両者の相関関係を検討することを目的とする。

方法

参加者 大学生の男女40名(男女各20名, 平均年齢21.77歳, $SD = 3.01$)が実験に参加した。

材料 本研究では, 以下の尺度を用いた。

(a) 名前の選好尺度 Gebauer et al. (2008) が作成したものを藤井他 (2016) が翻訳したものである。自身の姓・名・フルネームのそれぞれについて1(とても嫌い)～9(とても好き)の9件法で回答を求めた。

(b) 自尊心 IAT 藤井・上淵 (2010) による自尊心 IAT を用いた。自尊心 IAT は7ブロックで構成し, 手続きは Table1 のように進行した。

ブロック1(カテゴリー弁別課題, 20試行)では, 画面中央に呈示された刺激語が, 画面の左側, もしくは右側に表示された「自己」「他者」のターゲット概念のどちらに属するかを分類するよう求めた。この際, 参加者にはそれぞれ左右のターゲット概念に対応する二つのキー押し(左側に分類する際は「F」キー, 右側に分類する際は「J」キー)で分類するよう求めた。ブロック2(属性弁別課題, 20試行)では, 呈示された「自己—シャイな」の属性概念のどちらに属するかの分類を求めた。ブロック3(組み合わせ課題1, 20試行)およびブロック4(組み合わせ課題2, 40試行)は, ブロック1と2を組み合わせさせた課題に回答を求めた。画面左側に「自己」と「快い」が示され, 画面右側に「他者」と「不快な」が呈示され, ブロック1と2で呈示された刺激語の分類を求めた。ブロック5(逆カテゴリー弁別課題, 20試行)では, ブロック1の「自己—他者」の位置を逆にした課題への回答を求めた。ブロック6(逆組み合わせ課題1, 20試行)およびブロック7(逆組み合わせ課題2, 40試行)は, ブロック3, 4とは組み合わせが逆になった課題を実施した。具体的には, 画面左側に「他者」と「快い」が示され, 画面右側に「自己」と「不快な」が提示される課題を実施した。また, 組み合わせ課題と逆組み合わせ課題の実施順序は, 参加者ごとにカウンターバランスをとった。自尊心 IAT の刺激語は Table2 に示すとおりである。

Table1 自尊心 IAT の手続き

ブロック	内容	詳細	試行数
1	カテゴリー	自己—他者	20
2	属性	快い—不快な	20
3	組み合わせ1	自己+快い—他者+不快な	20
4	組み合わせ1	自己+快い—他者+不快な	40
5	カテゴリー	他者—自己	20
6	組み合わせ2	他者+快い—自己+不快な	20
7	組み合わせ2	他者+快い—自己+不快な	40

注) 組み合わせ課題の実施順序を相殺するために, 半数の参加者はブロック1, 3, 4と5, 6, 7の実施順序を逆にして実施した。

Table2 自尊心 IAT の刺激語

自己	他者	快い	不快な
自分	友人	うれしい	汚い
自身	知人	幸せな	残忍な
私	他人	気持ちいい	気持ち悪い
我々	知り合い	元気	苦痛
わたくし	ともだち	素晴らしい	落ち込む

注) 上段はカテゴリー語および属性語, 下段は刺激語を示す。

(c) ESE 尺度 Rosenberg (1965) の尺度を山本他 (1982) が翻訳したものをを使用した。「少なくとも人並みには価値のある人間である」, 「自分には, 自慢できるところがあまりない」など 10 項目から構成される尺度であり, 1 (あてはまらない) ~ 5 (あてはまる) の 5 件法で回答を求めた。

手続き 本実験は, 一部の参加者には講義時間の一部を利用し, 他の参加者には個別に依頼して行った。まず参加者に対し, パソコンを用いて課題を行ってもらうこと, この実験に参加するか否かは, 受講している講義の成績などとは一切の関連がなく, 参加は自由であること, いつでも参加を取りやめることができることを教示した上で参加を求めた。この説明は, 講義時間に実施した場合は口頭で, 個別に依頼した際は電子メールを用いて行った。この説明を聞いて (あるいは読んで) 参加を辞退した参加者はいなかった。続いて, 参加者はインターネットを用いてプログラム (Inquisit Web License で制御した) が置かれた URL にアクセスし, (a) ~ (c) の各尺度に回答した。実施に要した時間は 15 から 20 分程度であった。データが保存されたことを確認したのち, 参加者には謝礼として図書カードを渡した。

結果

各尺度の得点化 材料の箇所に記載した三つの尺度について, (a) 名前の選好尺度は 3 項目の合算平均を求めた。ただし, Gebauer et al. (2008) は, 全般的な SE の測定にはフルネームの好みを測定する項目が最も有効であるとして, この項目と他の変数との関連を中心に報告している。しかし, 本邦においても同様と言えるかを直接検討した研究はみられていないため, 本研究においては 3 項目の合算平均得点とフルネームの選好得点を比較する形で報告する。いずれも得点が高いほど, ISE が高いことを示す。(b) 自尊心 IAT については, Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) によって推奨されている *D score* を算出した。得点が高いほど, ISE が高いこと

を示す。(c) ESE 尺度は、逆転項目を処理した上で合算平均を求めた。得点が高いほど、ESE が高いことを示す。

なお、名前の選好尺度 (3 項目) と ESE 尺度の信頼性の推定値として、Cronbach の α 係数を算出したところ、名前の選好尺度は $\alpha = .86$ 、ESE 尺度は $\alpha = .85$ という値が得られ、一定の内的一貫性を有することが確認された。

性差の検討 本研究で使用した各尺度の得点について、それぞれ性差があるか否かを調べるために、対応のない t 検定を実施した。その結果、いずれの尺度得点においても、性差は有意ではなかった ($ts < 0.94, ps > .35$)。

記述統計量と相関分析 各尺度の記述統計量および相関係数を算出した。男女込みのデータを Table3 に、男女別に分けたものを Table4 にそれぞれ示した⁵。

姓・名・フルネームの選好の各得点の相関は男女込みの場合で .47 ~ .79 ($ps < .01$)、男性のみのデータで .45 ~ .82 ($ps < .01$)、女性のみデータで .51 ~ .87 ($ps < .01$) であった。また、姓・名・フルネームの3項目の合算平均得点と各項目の相関は男女込みの場合で .84 ~ .96 ($ps < .01$)、男性のみデータで .81 ~ .97 ($ps < .01$)、女性のみデータで .79 ~ .94 ($ps < .01$) であった。

IAT 得点との相関については、男女込みの場合、姓・名・フルネームのいずれの選好の得点との相関も有意ではなかった ($rs < .25, ns$) が、男性においては姓の選好得点と有意傾向の正の相関、フルネームの選好得点と有意な正の相関が認められた (順に $r = .41, p < .10, r = .45, p < .05$)。一方、女性においてはこうした有意な相関は認められなかった ($rs < .04, ns$)。

ESE 尺度得点との相関については、男女込みの場合、姓の選好得点と有意傾向の正の相関、フルネームの選好得点と有意な正の相関が認められた (順に $r = .31, p < .10, r = .38, p < .05$) が、男性においてはこうした有意な相関は認められなかった ($rs < .33, ns$)。一方、女性においては名の選好得点と有意傾向の正の相関、フルネームの選好得点と有意な正の相関が認められた (順に $r = .38, p < .10, r = .47, p < .05$)。

Table3 各尺度の記述統計量および相関係数 ($N = 40$)

	2	3	4	5	6	min	max	<i>M</i>	<i>SD</i>
1 姓の選好	.47**	.74**	.21	.31 [†]	.84**	1.00	9.00	6.70	2.19
2 名の選好	—	.79**	.16	.19	.86**	2.00	9.00	6.73	2.17
3 フルネームの選好		—	.25	.38*	.96**	3.00	9.00	6.55	2.10
4 自尊心 IAT			—	.09	.23	-0.30	1.40	0.69	0.44
5 自尊心尺度				—	.33*	1.40	4.60	2.85	0.80
6 名前の選好尺度合計					—	2.67	9.00	6.66	1.90

** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

⁵ 本研究は Gebauer et al. (2008) では報告されていなかった、男女別の相関分析の結果も報告する。この分析に至った理由および結果の解釈は考察において述べる。

Table4 男女別の各尺度の記述統計量および相関係数 (男女ともに $N = 20$)

	1	2	3	4	5	6	min	max	M	SD
1 姓の選好	—	.45*	.82**	.41†	.33	.87**	1.00	9.00	6.75	2.47
2 名の選好	.51*	—	.74**	.35	.03	.81**	3.00	9.00	6.95	2.11
3 フルネームの選好	.62**	.87**	—	.45*	.32	.97**	3.00	9.00	6.65	2.32
4 自尊心 IAT	.01	-.01	.04	—	.12	.46*	0.03	1.32	0.76	0.40
5 自尊心尺度	.28	.38†	.47*	.05	—	.26	1.40	4.60	2.86	0.88
6 名前の選好尺度合計	.79**	.91**	.94**	.02	.42†	—	3.00	9.00	6.78	2.04
min	2.00	2.00	3.00	-0.30	1.40	2.67				
max	9.00	9.00	9.00	1.40	4.20	9.00				
M	6.65	6.50	6.45	0.63	2.83	6.53				
SD	1.93	2.26	1.91	0.48	0.73	1.79				

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

注) 表の右上部分および右の4列は男性, 左下部分および下の4行は女性の相関係数および記述統計量をそれぞれ示す。

考察

本研究は, Gebauer et al. (2008) が提案した ISE の指標となる名前の選好を測定する尺度の得点が, IAT の得点と相関するか否かを検討したものである。その結果を受け, 追加の分析として男女別に分析を行ったところ, 興味深いと考えられる結果も得られた。ここからは, 順に結果について考察する。

姓・名・フルネームの選好の3項目間の相関関係 3項目間の相関係数は男女込みのデータで .47 ~ .79, 男女ともに .45 ~ .87 の有意な相関を示したものの, 姓の選好と名の選好の相関係数は, 男女込みの場合でも, 男女別の分析においても, 姓とフルネーム, 名とフルネームの相関係数と比してやや低かった。ただし, 3項目を合算した値との相関係数 (i.e., I-T 相関) は男女混みのデータで .84 ~ .96, 男女別の分析においても .79 ~ .97 という高い値を示しており, 内的一貫性も十分な値が得られていたことから, 3項目の合計値を用いることは, 信頼性の高い測定につながると言えるかもしれない。

Gebauer et al. (2008) との比較 続いて, 各尺度間の関係について, Gebauer et al. (2008) の結果と対応させながら確認する。Gebauer et al. (2008) では, フルネームの選好は ESE 得点, IAT 得点の両者と正の相関がいずれも有意であったが, 本研究における男女込みのデータでは, フルネームの選好は ESE 得点との正の相関が有意であったものの, IAT 得点との相関は正ではあるが有意には至らなかった。また, ESE 尺度と名前の選好尺度の3項目との相関に着目すると, Gebauer et al. (2008) では, ESE 得点は姓・名・フルネームの選好の各得点との正の相関が有意であったが, 本研究における男女込みのデータでは ESE 得点はフルネームの選好の得点

との正の相関が有意であったものの、姓の選好の得点との相関は有意傾向に留まり、名の選好の得点との相関は有意ではなかった。

この点について、名前の選好尺度の3項目のうち、一部の得点だけがESE得点と正の相関を示したことは、本邦において姓と名の重要性の違いを反映していた可能性が考えられる。そこで本研究では試みに、男女別に分けた分析結果も併せて報告することとした。なぜならば、本邦においては名に比して姓は婚姻・離婚等によって変化しやすいものであり、男女によってその変動可能性の見通しが異なると考えられるためである。

性によるIATとフルネームの選好の相関の相違 上記を受けて男女別の分析を行ったところ、女性においてはESE得点とフルネームの選好得点とは有意な正の相関、名の選好とは有意傾向の正の相関が得られたが、姓の選好との相関は有意ではなかった。また、姓についてはIAT得点との相関も有意ではなかった。その一方で、男性においてESE得点は姓・名・フルネームのいずれの尺度とも有意な相関がみられなかったが、IAT得点はフルネームの選好得点と有意な正の相関、姓の選好得点とは有意傾向の正の相関を示した(名の選好との相関は有意には至らなかった)。このように、男女別の追加分析を行ったところ、性別間で複数の相違点が見出された。

こうした相違はなぜ生じたのだろうか。まず考えられるのは、性別によって自身のアイデンティティとしての姓・名の重要性が異なっている可能性である。厚生労働省(2016)によると、平成27年度の婚姻件数(635,156件)のうち、夫の姓を名乗るのは609,756件(96.0%)、妻の姓を名乗るのは25,400件(4.0%)であり、昭和50年の統計(総婚姻数941,628件のうち、夫の姓を名乗るのは930,133件(98.8%)、妻の姓を名乗るのは11,495件(1.2%))と比して割合は増えているものの、夫の姓を名乗ることが極めて多い。この点を踏まえると、男性に比して女性の方が、将来的に自身の姓が変わる可能性が高いととらえており、それゆえに姓の選好得点とESE尺度得点に相関がみられなかったのかもしれない。

また、文化的な規範によって、各尺度への回答が影響を受けている可能性もあると思われる。たとえば、日本においては自己卑下的な自己呈示がデフォルトの戦略とされており(鈴木・山岸, 2004)、特に女性の方が自己卑下的な反応(能力を測定するとされるテストの成績について、自らの成績を「平均より下」と見積もる)を示すという研究もある(橋本・山岸, 2008)。そして、名前の選好尺度は意識的な自己報告尺度による回答であるため、回答時にそうした規範による影響が働いていた可能性も考えられる。こうした影響によって、男女を込みにしたデータにおいてはGebauer et al. (2008)と結果が一致しなかったのかもしれない。ただし、姓の選好を含め、本研究で使用した尺度の得点はいずれも性差はみられていないこともあり、上記はあくまで推察の域を出ないものである。

回答に影響を与えると思われる他の要因 上記に加えて、本研究の参加者の中に、姓や名が変わった経験を有する者がいたか否かは確認していない。もし、これまでに何らかの事情により姓や名が変わった経験がある者がいた場合、今回の尺度で測定した姓や名について、「現在

のもの」に対して評価を下していたかが定かでない。また、仮に改姓(名)後の期間が短ければ、新姓(名)に対する評価が形成されておらず、そうした者を分析に含めることが適切と言えるか不明確である。

その他に、これまでに自身の名前についてポジティブな経験をした程度、ネガティブな経験をした程度も、名前の選好の程度に影響を与える可能性があると思われる。たとえば伊藤・宮崎・河原(2016)は、提示されたターゲット人物の印象評定を行う実験において、ターゲット人物の名前が奇抜なものであるとされた場合、そうでない場合と比して、ターゲット人物はリーダーシップが低いと他者から評価されることを示している。そして、このように他者から評価される経験を経て、参加者が自身の名前に対してネガティブな評価を行うことも想定される。したがって、今後は自身の名前によってポジティブ・ネガティブな経験をしたか否かも併せて測定する必要があるかもしれない。

加えて、今回の測定で用いている「名前の選好」への回答は自己報告に依るものであることも注意が必要であろう。この尺度の測定対象がどのようなものであるかを回答者が推測することは難しいかもしれないが、回答にあたって自己報告という意識的な過程を経る以上、自身の名前を好むか否かという項目の性質を考慮すると、社会的望ましさの影響が生じうると考えられる。実際に、Gebauer et al. (2008) や藤井他(2016)では、名前の選好尺度と自己欺瞞尺度との間にごく弱い正の相関がみられることを報告している。

今後の展望 これらの点を踏まえると、本研究で用いた名前の選好尺度は、本邦においては改姓可能性による回答への影響が生じうる点や、自己報告式の尺度であるため、自尊心の呈示に関わる文化的規範や、本人が奇抜な名前を有するために経験したことの認知などの影響が生じうる点など、様々な制約・制限が生じるものであるかもしれない。しかしながら、名前は誰もが持つ、個人を示す分かりやすいラベルであり、いずれの国においても存在するツールである。質問項目も自身の名前がどの程度好きか、というシンプルな項目であるため、回答者の負担も少ない点は魅力であるといえよう。本研究においては、男女間で各変数間の相関の様相が大きく異なるという結果が得られたが、今後は、先述の解釈可能性を踏まえて、関連すると思われる複数の要素についても変数として収集し統制した上で、名前の選好尺度の測定対象を精査していく必要があるだろう。

引用文献

- Bosson, J. K., Swann, W. B., & Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 631–643.
- 藤井 勉 (2016). 大学生の潜在的・顕在的自尊心が試験後の感情に及ぼす影響——特に潜在的自尊心のバッファリング効果に注目して—— *人文科学研究*, 34, 449–470.
- 藤井 勉 (2014). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連 *心理学研究*, 85, 93–99.
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2016). 新たな潜在的自尊心の測定方法の検討——名前への選好を指標として—— *日本社会心理学会第 57 回大会発表論文集*, 111.
- 藤井 勉・上淵 寿 (2010). 紙筆版 IAT を用いた自尊心査定を試み *東京学芸大紀要総合教育科学系 I*, 61, 113–120.
- Gebauer, J. E., Riketta, M., Broemer, P., & Maio, G. R. (2008). "How much do you like your name?" An implicit measure of global self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 1346–1354.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464–1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 197–216.
- 原島雅之・小口孝司 (2007). 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果 *実験社会心理学研究*, 47, 69–77.
- 橋本博文・山岸俊男 (2008). 自己卑下的自己呈示における性差の検討 *日本心理学会第 72 回大会発表論文集*, 276.
- 星野 命 (1970). 感情の心理と教育 *児童心理*, 24, 1445–1477.
- 稲垣 (藤井) 勉・松尾和弥・大浦真一・鳥 義弘・福井義一 (2017). 被虐待経験が顕在的・潜在的自尊心に及ぼす影響——内的作業モデルを含めた検討—— *日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会発表論文集*, 123.
- 稲垣 (藤井) 勉・大浦真一・松尾和弥・鳥 義弘・福井義一 (2017). 顕在的・潜在的自尊心の不一致と自殺念慮との関連 *日本感情心理学会第 25 回大会発表論文集*, PS13.
- 伊藤忠弘 (2002). 自尊感情と自己評価 *船津 衛・安藤清志 (編) 自我・自己の社会心理学* 北樹出版 pp. 96–111.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 *教育心理学研究*, 53, 74–85.
- 伊藤資浩・宮崎由樹・河原純一郎 (2016). 奇抜な名前が社会的評価の印象形成に及ぼす影響 *日本認知心理学会第 14 回発表論文集*, 140.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 969–978.
- 厚生労働省 (2016). 平成 28 年度 人口動態統計特殊報告「婚姻に関する統計」の概況 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyukonin16/dl/01.pdf> (最終閲覧日: 2017 年 10 月 23 日)
- 中井彩香・沼崎 誠 (2017). 妬みややすい人はどのような性格特性を持っているのか? ——悪い妬み・良い妬みと他の性格特性の関連の検討—— *日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会発表論文集*, 147.
- Nuttin, J. M., Jr. (1985). Narcissism beyond gestalt and awareness: The name letter effect. *European Journal of Social Psychology*, 15, 353–361.
- 小塩真司・岡田 涼・茂垣まどか・並川 努・脇田貴文 (2014). 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響——Rosenberg の自尊感情尺度日本語版のメタ分析—— *教育心理学研究*, 62, 273–282.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーク自尊感情尺度日本語版の検討 *筑波大学発達臨床心理学研究*, 12, 65–71.
- 鈴木直人・山岸俊男 (2004). 日本人の自己卑下と自己高揚に関する実験研究 *社会心理学研究*, 20, 17–25.
- 津村健太・村田光二 (2016). 潜在的エゴティズムが対人魅力に与える影響——潜在的自尊心による調整効果の検討—— *パーソナリティ研究*, 24, 215–217.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 *教育心理学研究*, 30, 64–68.